

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	岐阜県
-------	-----

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	高山市立東山中学校			フロンティアティーチャー	淀川 雅夫	
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	1	13	26
生徒数	151	136	145	5	432	

II 研究の概要

1. 研究主題

生徒一人ひとりが生き生きと取り組む授業づくり

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

本校では、生徒一人ひとりに確実な基礎基本の定着を図ることをめざし、各教科の授業に焦点を当てた研究を進めていきたいと考えた。そして、研究の柱を「単元指導計画の作成」「指導に生きる評価の工夫」「評価を生かした指導形態や指導方法の工夫」の3つとし、どの教科でも、個に応じたきめ細かな指導を工夫していきたいと考えた。

その手立ての一つとして、少人数指導が挙げられる。今年度は、次のような理由から2年生で数学と英語、3年生で数学と理科において少人数指導をした。

<数学> 2年生では、図形の論証につまずきやすいこと、3年生では計算力や数学的な見方や考え方に個人差があるため。

<理科> 3年生では、既習事項をもとに、基本事項の定着と発展的な学習を進めていきたいと考えたため。

<英語> 2年生の学習は、中学校3年間の中でも、語彙と表現事項が増え、扱う文型も複雑になるため、個人差もついてくる時期であるため。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>○テーマ 生徒一人ひとりが生き生きと取り組む授業づくり ～きめ細かな指導に生きる単元指導計画の開発～</p> <p>○仮説 学習集団のさらなる質的な向上をめざしながら、「生徒の様相に応じた手だてを位置づけた単元指導計画の作成」「指導に生きる評価の工夫」「評価を生かした指導形態や指導方法の工夫」をすることで、生徒の到達目標に応じた確実な基礎基本の定着を図ることができ、主体的な課題意識を生み出し生き生きとした授業を展開することができる。</p> <p>○研究内容・方法 (1) 身につけさせたい基礎基本の明確化 (2) 評価規準にもとづく個に応じた手だての位置づけ</p>
--------	---

	<p>○テーマ 生徒一人ひとりが生き生きと取り組む授業づくり</p>
--	--

～きめ細かな指導に生きる評価のあり方～

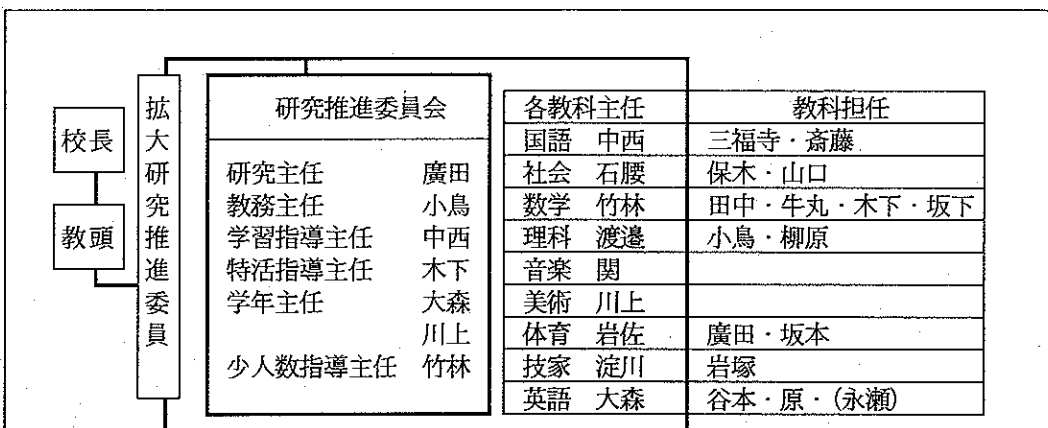
平成15年度

- 仮説
学習集団のさらなる質的な向上をめざしながら、「生徒の様相に応じた手だてを位置づけた単元指導計画の作成」「指導に生きる評価の工夫」「評価を生かした指導形態や指導方法の工夫」をすることで生徒の到達目標に応じた確実な基礎基本の定着を図ることができ、主体的な課題意識を生み出し生き生きとした授業を展開することができる。
- 研究内容・方法
(1) 個の理解や習熟の度合いを見極める評価の工夫
(2) 自己の力を正しく判断する自己評価の工夫

平成16年度

- テーマ
生徒一人ひとりが生き生きと取り組む授業づくり
～わかる喜びを実感でき、自ら学習に意欲的に取り組む生徒の育成～
- 仮説
学習集団のさらなる質的な向上をめざしながら、「生徒の様相に応じた手だてを位置づけた単元指導計画の作成」「指導に生きる評価の工夫」「評価を生かした指導形態や指導方法の工夫」をすることで、生徒の到達目標に応じた確実な基礎基本の定着を図ることができ、主体的な課題意識を生み出し生き生きとした授業を展開することができる。
- 研究内容・方法
・理解や習熟の度合いによる指導形態の工夫

(3) 研究推進体制



個に応じたきめ細かな指導のための一つの方法が「少人数指導」であるという
とらえから、すべての教科で学力向上フロンティア事業に取り組んできた。その
ために、9つの教科部会を3つのグループに分け、その中で1教科を全校研、他
の2教科をグループ研として、年間を通じて、全教科で研究授業を行った。その
実践の一部を紹介する。

<数学科の事例> (少人数指導の形態の工夫)

「生活班を母体にした等質学習集団」のほかに、1時間の授業の途中で2つ
のコース「自己の習熟度を判断し自己選択する習熟度別学習集団」に分かれる
授業を試みてきた。少人数授業は2・3年生が実施しているが、年度のスター
トは、学級全体の生徒の実態をつかむために、一斉で行う「T・T形式」「自
己選択による習熟度別学習集団」に分かれて行う形態を実施した。

<保健体育科の事例> (グループ内の役割分担と評価カードの工夫)

学習集団を等質グループに分け、それぞれのグループで班長やMO (集団面
観察者) やPO (技能面観察者) などの役割分担をし、単元やその時間の課題

の達成をめざして活動できるようにした。また、生徒一人ひとりが自己の学びの様相を的確にとらえるために自己評価カードの工夫をした。例えば、単元で

めざす姿を具体的に示し、毎時間の自分の姿を記録することにより、課題意識を持って取り組むことができるようにした。

<技術家庭科の事例> (教え合い活動の活発化と個人課題の明示)

教科係を「ミニティチャー」というように位置付け、教え合い活動を活発にさせた。また、その時間の各自の課題をワッペンにして示すことで、的確な指示ができるようにした。

<国語科の事例> (机列表の工夫)

評価規準に照らし合わせた生徒の様相等を記号化するなどして、簡潔に机列表に記入し、個に応じた指導の手立てを用意して授業に臨んだ。

- ① 評価規準にてらした一人一人の学力(様相)を記号で示した。
- ② 課題に対する個々のとらえと指導の方向を、一人一人示した。
- ③ 個に応じた指導として、特に配慮を要する生徒を把握し、どんな手立てを講じるのかを明らかにした。
- ④ 指導に生かせるよう、具体的な姿で一人一人の実態や指導の方向を示した。

このように、どの教科でも、個に応じたきめ細かな指導の方法を考え、実践し、教科部会ではもちろん、他教科とも交流を行い、全校体制で研究推進に臨んだ。

III 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

1時間の授業の中で「何を学び取り、何が高まったのか。」という自己の変容を実感として感じながら学習が進められれば、学ぶ喜びや学習の楽しさを感じることができると考えられる。また、自分がどこでつまづいているのかを自己分析でき、自己理解できることも、学習が成立している一面であるにとらえることもできる。

そこで、今年度は自己の学びを正しく判断できる力、学習を自分でつくり上げていく力を育て、そのための自己評価の方法について工夫していきたいと考え、サブテーマを「きめ細かな指導に生きる評価のあり方」とした。

生徒のつまづきの予想とその手だてを位置づけた単元指導計画をもとに、個の理解や習熟の度合いを知る評価と、個に応じた手だてのあり方を明らかにし、生徒一人ひとりに確実な基礎基本の定着を図ることをめざして研究を進めた結果、次のような成果が得られた。

- ・ねらいや評価規準に整合性を持たせたり、絞り込んだりすることで、何にこだわって指導していくのか、そのための手立てはどうすればよいかなどを改めて考えることができた。
- ・評価規準を明確にしたことで、生徒の学びの様相を以前より的確にとらえられるようになった。
- ・自己の学びの状況、努力の方向性が明確になったことで、意欲的に学習に向かう生徒が確実に増え、生徒の意識の変容がみられた。
- ・学習の基盤である学習集団づくりや学ぶ姿勢づくりを教師と生徒が共に考え実践していくことで、自ら学ぶ姿が多く見られた。
- ・少人数指導を実施することにより、より個に応じた指導ができるようになった。また、ほとんどの生徒が、少人数指導は「わかりやすい。」「質問しやすい。」「自分が決めたコースなのでやる気がでる。」など、そのよさを肯定的にとらえている。
- ・Cと判断される生徒への手だてや補充的な指導を考えていくことで、より確実

な基礎基本の定着を図ることができた。

また、12月末に、保護者を対象に、次のようなアンケートをとった。その結果、昨年度より僅かではあるが、きめ細かな指導の効果はあがっているようである。

各教科できめ細かな指導（少人数指導など）を行っています、確かな学力（基礎・基本の定着など）は身につけているとお考えですか？

（現在2年生と3年生の保護者を対象。平成14年度と平成15年度との意識の変容）

平成14年度（1年）		平成15年度（2年）	
大変身についている	（ 1%）	大変身についている	（ 8%）
身についている	（52%）	身についている	（49%）
あまり身についていない	（36%）	あまり身についていない	（37%）
身についていない	（12%）	身についていない	（ 2%）

平成14年度（2年）		平成15年度（3年）	
大変身についている	（ 4%）	大変身についている	（10%）
身についている	（56%）	身についている	（60%）
あまり身についていない	（38%）	あまり身についていない	（28%）
身についていない	（ 3%）	身についていない	（ 2%）

<大変身についている・身についていると答えた代表的な保護者の意見>

- ・家庭での学習姿勢から成果を感じる。学ぶ姿勢が身についてきた。
- ・分からないところがあっても、先生に聞き、教えてもらえ、安心している。
- ・少人数指導により、生徒側もわからない箇所の質問がしやすかったり、安心感を持ったりしている。
- ・少人数指導の授業を参観し、先生の目が行き届きやすいように感じました。ずっと続けてもらいたい。
- ・頑張った努力が身についていく指導をしていただいていると思う。
- ・個人差はあると思うが、学力は身につけてきていると思う。
- ・授業に向かう子ども達の姿がとてもよい。先生方も一生懸命で、子ども達の中に、互いに競い合い、磨きあって伸びていこうとする心が感じられ、親としてもうれしい。
- ・理解力は個人差があるが、先生方は少人数指導などの方法を考えてみえありがたい。

このように、とても肯定的にとらえていただいている反面、次のような課題もいただいた。

<十分身についていない・あまり身についていないと答えた

代表的な保護者の意見>

- ・子どもの学力があまり上がっていないと思う。頑張っているのに今ひとつ伸びないような生徒に目を向けてほしい。
- ・もっと、地域の人材を活用し、少人数指導を推進してほしい。
- ・少人数指導は、子どもにあった分け方をしてほしい。
- ・学力は身につけていると思うが、結果が出ていない。本当に分かっているかどうかの確認をしっかりとしてほしい。
- ・少人数指導でも、聞きたくても言い出せない子もいる。
- ・3教科だけではなく、どの教科でも実施してほしい。

2. 今後の課題

評価というと、終末の生徒の発表内容や感想などで行う場合が多いが、単位時間内の生徒のつまづき解消のために、1時間の授業過程の中でのタイムリーな指導につながるような評価を、さらに工夫していきたい。また、Bと判断される生徒への発展的な内容の指導の充実を図り、各教科におけるきめ細かな指導を、さらに充実させ、確かな学力が身につく指導に徹していかなければならない。

保護者のアンケートでは、おおむね少人数指導や個に応じた指導について、「効果が上がっている」「支持できる」という回答をいただいたが、「まだ、一人ひとりの実態に合った指導ではない」とか「学力の定着が十分に図られていない」といったご指摘もいただいた。きめ細かな指導に徹してきたつもりだが、生徒の自己評価力がついていなかったり、どこまで理解できているかなどの確認の方法にはまだ研究の余地が残されているように思う。特に、少人数指導においては、さらに実践を深め、そのあり方を確かなものにしていきたい。

今後、「誰一人としてわからない生徒をつくらない」という意気込みを持ち、そのための方法について探っていききたいと考えている。

また、本校では、研究の基盤となる学級集団（学習集団）づくりにも力を入れ、「授業作り委員会」という生徒会組織を結成した。これによって、生徒の中から、「生き生き授業をめざそう」という動きが生まれ、そのための取り組みも行っている。これらは、生徒の自主性を重んじながらも、教師の見通しを持った指導を行うことで、生徒と教師が共に歩む体制をとっている。来年度は、よりいっそうの学習集団のレベルアップを図りたい。

来年度は、学力向上フロンティア事業の最終年度となる。「評価を生かした指導形態や指導方法の工夫」に重点をおきながらも、3つの柱を総合的に連動させて、研究を進めていきたい。

IV 学力把握のための学校としての取組

- ・学力調査の実施（年1回）
- ・定期テスト（年4回）
- ・各学年での実力テストの実施

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 公表会の実施
 - ・日 時：平成15年12月5日（金）
 - ・場 所：高山市立東山中学校
 - ・テーマ：生徒一人ひとりが生き生きと取り組む授業づくり
 - ・対 象：飛騨地区小中学校
- ホームページの作成（フロンティアティーチャー）
 - ・今年度の研究のまとめを本校ホームページに掲載予定である。
- 教育課程研究集会の全体会において実践発表
 - ・日 時：平成15年8月8日（金）
 - ・場 所：飛騨・世界生活文化センター

-
- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無
-